



木を切るってどういうことなのかな ～カプラとの出会いから～

「カラカラカラッ！」とランチルームに響く気持ちの良い音。これはカプラという積み木が崩れていく音です。炭平コーポレーションの玉木さんにこのカプラをお借りし、たくさん遊ばせてもらいました。高く積み上げたり、ドミノをしたり、造形遊びをしたりと、その使い方は様々で、4000個ほど持ってきていただいたカプラが取り合いになるほど子どもたちは喜んで遊んでいました。遊んでいる中で感じたのは、木の音の気持ち良さや、木の香りの心地良さでした。「この木はどんな木を使っているんですか？」と玉木さんに質問するNさん。このカプラは北相木村の“カラマツ”という木で作っていることや、カプラを作るためにカラマツを使っていることなどを教えていただきました。いらなくなった木を利用してこのカプラを作っているのではないかと考えていた子どもたちは、木の使い方について疑問をもち始め、ここから木を切るということ（林業）に目を向けていきました。



カプラ体験

林業のお話を聞くことで変わってきた“木を切る”ことへのイメージ

「木を切ることは自然破壊につながるのではないか。」と、木を切ることにあまり良くないイメージや罪悪感をもっていた子どもたち。そこで、北相木村役場で林業に携わっている坂本さんにリモートで林業のことについてたくさん質問をさせていただきました。そこで分かってきたことは、日本の林業の現状と外国との貿易の関係、森林が果たす役割、そして林業に携わる方々の思いでした。枝打ちや間伐などは、森林を守るための“手入れ”だということ、「苗木を植える、育てる、収穫する、上手に使う」というサイクルが環境を守ることに繋がっていること、林業に携わる方々には木を切ることで自然（動物も含めて）を守りたいという思いをもった方がたくさんいることを知り、子どもたちの木を切ることへのイメージが変わっていきました。外国から木材が大量に輸入されていることについてTくんは「外国の木は安く手軽に手に入るから安定供給のためにはいいのかもしれないけど、やっぱり日本の木を使うことができればもっと日本の森林を守っていけるんじゃないかな」と、考えを深めていきました。今、自分たちが行っている木を使ったものづくりも、森林のことを考えると、小さなことだけど、とても意味のある活動に感じてきました。



木を使ったものづくり

キノハナ体験



キノハナ kinanoさんとの出会いから

そんな中、坂本さんが中心となって活動しているkinanoさんのキノハナの体験をさせていただくことになりました。キノハナは木を加工する時に出てくる鉋くずを利用して作ったお花です。「鉋くずを燃料としてただ燃やすだけではなく、何かに利用できないか」そんな考えから生まれたもの



だそうです。体験をした子どもたちは「鉋くずがこんなにきれいな花になるなんて!!」と驚いていました。“木に付加価値をつけ、もっと木の良さを広めていきたい”そんな坂本さん達の思いを受け取った子どもたちは、自分達もこれまで学んできたことや、木の無限の可能性をまずは全校のみんなに広めていきたいと願っています。「木を使ったものづくりの楽しさ、森林学習で学んだ環境への思い、それをしっかり伝えていくために何ができるかな」そんなことを考えながら、今後の活動への期待を膨らませている5年2組の子どもたちです。

